



今年で4回目のケニアの難民キャンプでのワークキャンプには、1.0名の青年が参加し、8月の1ヶ月間、難民の人たちと一緒に汗を流しました。

図書館建設—私たちのワーク

小島 史實

ドン・ボスコ・センターとメインロードを結ぶ通りに面した一画が、私たちの作業現場。つまり、図書館の建設予定地である。そこで作業を手伝うべく、私たちは月曜から金曜の午前中はそこに通った。朝9時に宿舎内のカー・パークに集合し、車を手洗して現場へ。作業を手伝って、正午過ぎにドン・ボスコの車に便乗させてもらいコンパウンドに戻る、というのが日ごとのパターンだ。

現場では、建築の知識をもつケニア人が監督となり20人程度の難民（主にスーダン人）に指示を出す。作業する難民の人々にはわずかなインセンティブ・ペイが支払われているらしいが、彼らはキャンプ内仕事がなく困っているのが低資金でもあろうこうとする。というが、働かざるを得ない。1日働いても100シリングももらえない（ジュース500mlで30シリング）が彼らにとっては貴重な現金収入である。

私たちが建設作業に参加して数日後、ある事件が起きた。朝、いつも通り現場に行くとき、そこいきなり大ゲンガが始まった。数人の暴れまくる人を囲んだ50人程度の難民のカタマリが右へ左へと大きく揺れ動く様子を私たちは呆然とした。石や棒を手にした暴民を横目に、わけも分からぬまま私たちがはりに結ばれ、宿舎に避難した。後で聞いた話だと、住民の立ち退きに対する不満が爆発したらしい。現場の住民が立ち退きに際し、LWFから新しく家が建てられた材料をもらはずだったのに、まだもらっていないとして、このような事件が起きたらしい。事件の真相は良く掴めなかったが、LWFと難民側とのコミュニケーションが上手くいってなかったことが一つ問題点ではなかったのだろうか。いくら私たち難民のみなさんのためと思って図書館を建てても、彼らに受け入れられなければ何の意味もない。そんな気がした。

生活用品も事欠く難民キャンプでは、シャベル、クワ、はりがね、一輪車、バケツなどの建設用具も材料も、あらゆるものが不足している。故に、朝、私たちが事前にナイロビで購入しておいたシャベル（10本）とクワ（5本）は大活躍であった。現場は雨地だったが、掘り進む時は地面を滑り、無茶するとシャベルの先端の曲がため、（広く掘る場合は）クワは重宝した。シャベルも現場には壊れかけのものが数本あてられたので、私たちが買っていたのと同じくらい大きなものになっていたと思う。一輪車もして、現場で3台使っていたが、車輪が壊れにもはずれそうなまでフルに使っていた。私たちは、余分は持っていく軍手現場の人々にあげたのだが、これは大変喜ばれた。イボ付きのものはすべりにくく特にはよく使われた。見物に来た人々にも喜ばれたほどだった。

作業は、素人の私たちが見ても効率が悪いと思うところもあつた。一見無駄話をしているように思える光景もあった。また、「ボレボレ（ゆっくり、ゆっくり）」と作業する難民の人々との交流から学ぶことも大変多かった。出会いのきっかけもなった。このような交流は、お互いの見解や誤解をなくすためにも必要なことだろう。（監督はせかしていたが）また、隔気な彼らの会話やジョークは、私たちにとってつらいはずの作業を明るく、楽しいものにしてくれた。

私は、難民との対話の中で、彼らの教育に対する思いが非常に熱いことを知った。私たちが建設を手伝った図書館が、あらゆる難民に対して開かれたものとなることを心から願ひ、期待している。



近況報告 梁榮輝

タンザニア 難民キャンプ

現在、私はタンザニアの難民キャンプに来ています。このキャンプはブルンジとの国境附近のキボンドという小さな町から30Kmほど離れたところに位置しており、ブルンジから来たツツが難民として主に生活しています。彼らはツツ族による虐殺から逃れるために、日々、数千人という単位でこの難民キャンプへやってきます。私の仕事は土木に関わることで全般なのですが、先月までは測量部門で働いていました。この部門には2人のスタッフ（2人とも難民）が定数に働いており、彼らと一緒に測る。現場建設のための測量も現場で行っていました。ちょうど昨日、難民に対する土地の割り当てが終了し、店の建設に入ったことですので、測量の仕事もなくて、感じたことは、測量が本当に面白くないということ。大学や企業の倉庫の中で寝ている測量機器があれば（古くて使えればかまわない）ぜひ返って下されば有効活用できるとおもいます。

11月2日

こちらでの生活ももう2ヶ月が過ぎました。いまこの地帯は雨季に入っており、毎日雨の日はあがりません。ただ日本の梅雨のように1日中、雨というわけでもないのが好きです。雨季の仕事は10月以降ですが、今週末が水曜日の仕事になります。こちらの土壌の特徴で大変な難民、11月にこの仕事を受けました。今日、測量の仕事のレポートを書き終えました。いよいよ当初の目的のポンプづくりに戻りたいと思います。測量の仕事は正直な話でどれだけ貢献できたかと、問われたら答えるのが大変難しいと答へざるを得ません。この報告だから（ゴールをローマで書いている）説明がつかないというので、今後ちゃんと説明します。数週間前にも、ちょうどした病気（食あたりとと思う）になったとき、少し無力かっていたのですが、徐々に回復してきました。現在、1月の後半から2月の前半にこちらを離れようと考えています。

古物の積み込みにも忙しかつた梁栄、左側



カンボジア最貧地域に小学校を！



雨具で装備した森田さん

しかも、雨のために水浸しになっているのだ。内戦中の軍用トラックがついた難民道で深々深く掘っており、まっすぐに走ることができない。また途中、水である深さの川をバイクを担いで3本もわたらなければならなかった。転倒も幾度かあり、エンジンがかからなくなってひやりとする。バイクでこんなにも頭丈なんだと感心しつつ、興奮していたため大変さをおもひ感ない。最後は夜の暗闇の中を突っ走って、やっとのことで目的の村に着いた。

私の訪れたチリウ地域には電気がない。水はおがめに貯めた雨水を使い、夜になれば明かりはよくする燐火だけ。家はカンボジアの伝統的な様式に従っているが、この村では骨組み以外を木製材料を使わず、屋根を直ぐの土に干した草を壁にも使っている。このチリウ地域の人々は昨年難民キャンプから戻ったばかりで、その時は家すらなく木の下で雨露をしのいでいたという。この地域の人々は貧しい中でもさらに貧しい人々なのだ。実際、LWSのカンボジア人スタッフでさえも初めて見たときこの状況を信じられなかったという。アンドル一連は私のためにバッテリー式の蛍光灯や、蚊帳、食料、ミネラルウォーターを選んできた。これは村人の生活から見ればひどく贅沢なものだ。

翌日訪れた村では、子供達の多くがマラリアや細菌による病気にかかっていた。子供達の実数は少なく、うつろな目をしている子も多い。今まで生まれた子の半分以上が亡くなっていたというが、LWSの支援によってそれも改善されつつある。その村で1人の少女がグループワークに似た野生の果物をくれた。スタッフに促されて、はにかみながらそれを渡してくれた彼女は、無事成人することができるだろう。

もちろん私が訪れたのはカンボジアでも最貧の部類に属する地域だ。僻道、州都に近くにつれ、生活水準が良くなるというのが実感できる。ここでこそさらなる豊かさを強調したくはない。哀れみかへ施しをしても、彼らのためにはならないし、彼ら自分たちの力で生活水準を向上させていくことは決して不可能なことではないから。

カンボジアの多くの地域は豪やに恵まれている。米も豊かに実る。適切な支援があれば、彼らが経済的に自立した生活を送るようになるまで、それにどの時期はかからないのではないかと、私は勝手に思い込んでいる。日本のそれを連想させた。そんなとき、そこが同じアジアであることを痛感する。彼らに私たちがこの国に対する関心をほとと失ってしまった。内戦も終結したいま、彼らは着実に復興への道を歩んでいる。この国のために、私には何ができるだろうか、と自問自答する者だった。（東工大大学院生）

集まった村人



カンボジアワークキャンプ参加者募集

オールド郡は、30年の戦いの結果、一つの学校も存在しないほどに放置されています。昨年の省の調査では、五千人の学齡児童が小学校にゆずり、中には資金もなく何の手立てもなされていません。今年から数年の計画で、村ごとの労働単位により安価な手作りの小学校を3つの地域に3校つくり、11人の先生を訓練するプロジェクトを計画しています。これで47.0人ごとが小学校で受けます。

- 期間：98年2月22日(月)ー3月4日(木)
- 訪地：カンボジア
- 募集員：8名
- 費用：1.8万円
この費用は国際航空運賃、訪問地での宿泊、食費、旅行保険などのプログラム費です。ただし、日本国内での交通費、パスポート取得費空港税は含まれません。
- 募集対象：健康に自信がある方。未成年の方は親の同意書が必要です。
- 申込締切：1999年2月1日
- 申込方法：氏名、性別、職業、パスポートの番号、電話番号など記入の上、参加申請書と履歴書と面接表に書いて申し込み、申し込みを受理を懸念する場合は、2月1日に書類送考を行う。

● 申込問合せ先：わかちあひプロジェクト TEL.03-3634-7809 Fax.03-3634-7808

現地協力団体：ルーテル世界連盟 世界事務本部(LWS)、カンボジア事務所